

平成23年 6月20日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20890201

研究課題名（和文） Maternal Confidence を育む看護介入に関する研究

研究課題名（英文） A study of nursing intervention brings up Maternal Confidence

研究代表者

中河 亜希（NAKAGAWA AKI）

佐賀大学・医学部・助教

研究者番号：70453222

研究成果の概要（和文）：本研究は、母親の Maternal Confidence を高め、母親としての発達を促すような看護介入を明らかにすることである。助産師にインタビューを行い、以下のカテゴリが抽出された。【体力の回復を気遣う】【身体の安楽を促す】【分娩体験を肯定する】【子どもの世話への意欲をほめる】【子どもの世話が上達していることを認める】【分からないことは具体的に伝える】【母親が調整することを承認する】。今後は、母親の Maternal Confidence の源を明らかにし、必要な援助を見いだすことが課題である。

研究成果の概要（英文）：This study is to improve mother's Maternal Confidence, and to clarify the nursing intervention that presses development as mother. Four midwives were interviewed and the following categories have been extracted. 【It worries about the restoration of strength】【The ease of the body is urged】【The birth experience is affirmed】【The desire for the child's care is praised】【The child's care is admitted to progress】【It is concretely told not to understand】【It is approved that mother adjusts it】 It will be a problem to clarify the source of mother's Maternal Confidence, and to find necessary care.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成20年度	1,250,000	375,000	1,625,000
平成21年度	1,040,000	312,000	1,352,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,290,000	687,000	2,977,000

研究分野：生涯発達看護学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：看護学 Maternal Confidence

1. 研究開始当初の背景

出産や育児は母親である女性だけでなく、夫や家族にとっても発達課題として重要な

過程である。近年、核家族化の進行と同時に地域社会との結びつきの低下に伴って、孤立した環境の中で育児を行っている母親が増

加傾向にあることが指摘されている。

さらに、育児不安やマタニティブルー、乳幼児虐待など深刻な社会問題も浮かび上がっている。

そうした背景の中で、産後1か月児健診を受診する母親を対象とした調査では、対象の25%の母親が育児に対して自信がなく、16%の母親は子どもを虐待しているのではないかと多少なり感じていることが報告されている。

さらに現状では育児に関する負担や不安を家庭内で解決することは困難であるといえる。女性が母親になる過程では育児を通して自己の成長を実感でき、母親が感じる自信は健康な母子関係の原動力となるため、産後サポートの主たる担い手である夫や実母との関係性も重要である。

また、自身の母親役割の不確かさを感じると母親としての自信を得にくいことから、母親としての自信は女性が母親になる過程と密接に関係している。

また、厚生労働省が2007年度から開始した生後4か月までの全戸訪問「こんにちは赤ちゃん事業」では、母親とその家族の支援と孤立化の防止、乳児の健全な育成環境の確保を目的としており、その重要性と対策は急務を要すると考える。

以上のことから、母親が自信をもって出産をして、子育てができるように支援することは看護にとって重要な課題である。

妊娠・出産・育児に関する研究は、母性意識の発達や母親の役割取得と適応に焦点を当てたものであったが、最近では母親の準備性、Self-EfficacyやMaternal Confidenceが注目されている。Maternal Confidenceは、自己効力感の理論や「母親としての自己確立のプロセス」に関する理論、役割能力の理論を背景として定義されており、母親としての

課題や取り組み、子どもとの関わり、母親としての発達に関連しており、「知識」「行動」「マネジメント」「感受性」の側面から構成されている。

Maternal Confidenceに関する研究は、その構成要素とソーシャルサポートとの関連は肯定的な影響を及ぼすことが明らかとなっており、また家族サポートの影響もうけることが報告されている。

また、育児を行う母親の自信を支えるアプローチに関する研究では、母親が育児の体験を語ることや母親の役割が明確化されるような情報提供の重要性を述べている。

一方で、母親と家族を支援する看護者がMaternal Confidenceを支えるために実践している看護介入に関して焦点を当てた研究はないため、母親に必要とされるサポートと提供されている看護を双方から分析する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、母親のMaternal Confidenceを高めるために助産師が行っている支援を抽出し、よりMaternal Confidenceを高めるような看護介入を明らかにすることである。

また、生後1か月の子どもを持つ女性の「Maternal Confidence」を明らかにし、「Maternal Confidence」の源、すなわち「子育てに関する知識と技術」「夫あるいは実母からの産後サポート支援」「実母との親子関係」「専門職からの支援」などがどのように関連しているかを明らかにすることである。

本報告書において以下の2点について成果をえたので報告する。

(1) 母親が自信を持って育児をするとはどういうことか、またどんなことで不安を解消しながら育児の自信を高めているのかを明らかにする。

(2) 助産師の行う支援のうち、母親の **Maternal Confidence** を維持増進するような支援はどのようなものを質的分析により明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 育児・自信をキーワードとして **Maternal Confidence** の実態、子どもの健康の保持増進を支える力、子どもとの生活に関する生活行動力、育児に関するマネジメント力、子どもに対する感受性力、子どもとの生活に関する知識の実態について国内の文献を検討した。

(2) 対象は、臨床経験5年以上の助産師で、研究の主旨を理解し研究協力に同意の得られた者とした。倫理的配慮として、研究の参加や辞退は本人の自由意志であるとともに、研究協力に同意せずとも不利益を被らないこと、得られたデータは本研究の目的以外では使用しないことを書面および口頭で説明した。調査期間は、2009年4月から2010年3月である。

研究デザインは半構成的面接法による後方視的記述研究とした。面接時間は1回60分とした。インタビュー内容は、助産師本人が行っている産婦の自己効力感を高めるケアについて語ってもらい、さらに産婦の母親としての発達に関連する「知識」「行動」「マネジメント」「感受性」の観点から母親に育児の自信を持たせる関わりについて語ってもらった。対象者の承諾をえてICレコーダーに録音し、逐語録を作成し質的研究手法により分析した。

4. 研究成果

(1) 育児不安のある母親は、育児に自信がないと感じストレスを強く感じているが、育児をマネジメントし、自分が行っている育児

に対して承認を得ること、自分なりに子どもに接したことで成果を感じることに自信につながる体験となっていた。また、育児の苦労や子どもの成長に対する喜びを共有し家族や当事者が支えあうことが育児に対する自信を高めることにつながるということがわかった。

(2) インタビューの結果、以下のカテゴリを抽出した。

- ①【体力の回復を気遣う】
- ②【身体の安楽を促す】
- ③【分娩体験を肯定する】
- ④【子どもの世話への意欲をほめる】
- ⑤【子どもの世話が上達していることを認める】
- ⑥【分からないことは具体的に伝える】
- ⑦【母親が調整することを承認する】

カテゴリ①～③は、これから実際の育児の始まる産褥早期に行う支援として顕著であった。また初産婦と経産婦のいずれにも同様に意識され行われていた。今回の面接対象者が入院施設のある施設で助産師として従事しているため、特に産後の回復のケアを重点的に語られたと考えられる。

カテゴリ④～⑦は実際の育児場面で直接母親に伝えられることが多く見受けられた。新たに母親としての役割を明確にするために、母親のニーズを明確にし、有効なサポートを提供することが必要である。母親にとって看護者に体験を聞いてもらうということは、育児に対する感情や努力を受け止めてもらえたと感じる効果があると言われている。一方で看護者は母親の語ることからニーズを知ることができ、看護援助の第1段階となる。特に初産婦にとっては、育児は初めての体験であることが多く、入院期間の短期間で習得できるようなことではない。そのために、母親が判断し、今後の見通しを持てるような

関わりがなされていた。

今回得られた研究成果として、助産師が行う支援から **Maternal Confidence** を高めるような看護介入を抽出した。今回は産後の入院中に行われる助産師の支援であった。多くの褥婦は産後1週間前後で退院し、家庭での生活が始まるため、助産師の支援が十分に届かないことも考えられる。生後1か月の子どもを持つ母親の特徴をふまえ、この結果を基に生後1か月の子どもを持つ女性の「**Maternal Confidence**」を明らかにし、「**Maternal Confidence**」の源、すなわち「子育てに関する知識と技術」「夫あるいは実母からの産後サポート支援」「実母との親子関係」「専門職からの支援」などがどのように関連しているかを明らかにすることが次の段階への研究課題となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中河 亜希 (NAKAGAWA AKI)

佐賀大学・医学部・助教

研究者番号：70453222

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし